不屈

熊本県版
No. 236
治安維持法犠牲者
国家賠償要求同盟
熊本県本部
〒862-0954
熊本市中央区神水
1-30-7 コモン神水
☎096-381-1807

運動の基本

ふたたび戦争と暗黒政治を許さないために

一、治安維持法体制の復活に反対する。

二、国は戦前の治安維持法が人道に反する悪法であることを認めること。

三、国は、治安維持法の犠牲者に謝罪と賠償を行うこと。

13人で「天草支部」結成！

―映画『伊藤千代子』上映実行委員会も―

今年初めから準備を進めてきた同盟天草支部の結成総会が、11月26日（金）、天草市で開かれ、13人で結成を確認しました。天草地域にはこれまで10人の同盟員がいましたが、この日の結成総会にはまだ同盟に入っていない人も4人参加し、うち3人がその場で加入申込書に署名し、13人でのスタートとなりました。

総会を準備してきた事務局から支部長、事務局長の提案がありましたが、支部長に推薦された人が「今すぐには決断できない」というので「保留」とし、とりあえず濱明満事務局長を中心に運営していくことになりました。

総会には小田憲郎県本部会長と渡邉靖弘事務局次長が出席し、小田会長が天草支部が県内3つ目の支部として結成されたことに祝意を述べるとともに、あらためて「なぜ今、治安維持法なのか」について講演しました。

その中で小田会長は、治安維持法は決して遠い過去の問題ではなく、治安維持法の内容はアベ・スガ政権の9年間で特定秘密保護法や盗聴法、共謀罪、国民総背番号制（マイナンバー法）、戦争法、重要土地利用規制法などとして次々と法制化され、まさに今現在の問題だと強調。そしてその総仕上げとして今、憲法9条をはじめとする憲法改悪の策動が前のめ

天草支部結成総会（11月26日、天草市にて）

りで進められようとしていることを指摘し、治安維持法がどんな法律で、どんなに危険なものであったかを広く国民に訴えていくことがいま特に強く求められており、それをやるのが治安維持法国賠同盟だと強調しました。

結成総会では映画『わが青春つきるとも―伊藤千代子の生涯』の天草市での上映運動にとりくむことも提案され、当面、上映債券（10万円）確保をめざして上映実行委員会を立ち上げて活動していくことが確認されました。

熊本県における同盟の現勢

会員数　188名（6団体を含む）

支部　3支部

人吉球磨支部　24名

八代支部　7名

天草支部　13名

来年6月に予定されている全国大会までの目標は会員数200名です。あと12名になりました。この間の経験から支部結成は会員拡大と同盟発展に不可欠です。今後も各地の会員と連携し、支部結成を目指します。

憲法署名を同盟の署名とセットで！

今度の総選挙の結果、改憲勢力は維新を加え国会の3分の2を大きく超えました。国民は改憲に関心は薄いのに、改憲勢力は今がチャンスと動きを活発化させています。選挙後、維新の松井代表は「来年の参議院選と同日に改憲の国民投票を」と自民党をけしかけ、9日に早速開かれた憲法審査会の与党協議には維新の会、国民民主党も参加したとあります。野党の反対をよそに強引に改憲審議を進めようとしています。これに歯止めがかけられるかは国会だけでなく、市民の大きな反対の声が今まで以上に組織できるかにかかっています。

自民党の改憲の最大の狙いは9条改悪で、自衛隊の国軍化にあることは間違いありません。日本は戦後、日米安保体制の下で米国に従属してきました。日本国憲法はこと米国の軍事・経済に関しては治外法権であり、米軍の振る舞いは全くの無法です。どれだけ国民が憲法を盾にとって違法を訴えても米国はもとより日本政府も無視するのですから話になりません。

なぜ改憲を急ぐのか。米中の緊張関係に答えがあると思います。ソ連が崩壊した後、米国は世界の覇者でした。しかし、米国はテロとの戦いで疲弊していく中、中国は経済的にも軍事的にも米国を凌ごうという勢いで迫ってきています。世界中で覇権を争う存在となりました。

自民党政権は日米軍事経済同盟を強化し、中国封じ込めに舵を切りました。日本の中では中国の威嚇・脅威を宣伝し、先入観を植え付けていますが、逆に中国の立場から見れば、米国の威嚇・脅威を感じ緊張しているのは明らかです。軍事力で対峙すれば、軍備増強は底なしです。いつ暴発するかわかりません。戦力不保持の憲法9条の果たしている役割はとても大きいものです。何としても変えさせてはなりません。

戦前、治安維持法は「国体を変革する」ことを罰しました。「国体」とは天皇制絶対国家でした。では、戦後の日本に「国体」に相当するものはないのでしょうか。日米軍事同盟が強化され、安倍政権が改変してきた秘密保護法、安保関連法、共謀罪、集団的自衛権容認などを見れば、「日米安保体制」が「国体」であり、戦前と同じように「国体を変革する」ことが弾圧される時代が目の前に来ているのではないでしょうか。

そうならないために、いま！対話をよりいっそう重視しましょう。二つの署名は日本の過去と現在の一貫性をきびしく問うものです。

スクランブル交差点（話題を追って）

むのたけじさんを知っていますか

不屈県版9月号に載った吉岡弘晴氏の「東條英機を激怒させた、ジャーナリスト・吉岡文六」を読んで、こんな骨のあるジャーナリストが郷土にいたんだと感銘しました。そしてすぐ思い出したのが、むのたけじさんです。

むのたけじさんは新聞記者で、敗戦の時戦争に協力してきた自分を恥じて、新聞社に辞表を出し、郷土秋田にかえって『たいまつ』という新聞を出し続けました。

むのたけじさんは、相手に伝わる言葉は、3～5秒くらいの長さの詞（ことば）だと言って毎号、詞を載せていました。今回紙面のゆるす範囲で、むのたけじさんの詞を載せます。

▼　ふだんのくらしの言葉でいいあらわせば、一番わかりやすくて一番短い。それが一番簡単そうで一番むずかしい。

▼　判断に行きづまったら、最後にたよりになる物差しは〈人間〉である。そのことは人間の何をもたらすか―とりわけ、誰のためになることかという視点から判断すれば、大きなあやまりを犯す恐れはない。

▼　家庭の中で、つとめて社会の問題を語り合うことだ。すると必ず子どもが賢くなる。それだけ親も賢くなる。

▼　人の一生は〈なぜ〉ではじまって、〈なぜ〉でおわる。木が年輪の波をひろげて伸びるように、人は一つの〈なぜ〉の中から新しい〈なぜ〉をひろげて伸びていく。それゆえに人生の努力目標は三つである。一に疑うこと、二に疑うこと、三に疑うことである。

▼　反抗とは青年の権利だって？とんでもない。反抗は青年の義務だよ。義務としての反抗はなんだ、そのことに目ざめないなら十分に青年ではないね。

▼　「平和のための軍備」という理屈が成り立つかどうかは、菓子を包んだ紙を菓子の一部と認めるか否か、という議論に等しい。

▼　怒鳴るな。怒鳴って解決できる問題は一つもない。歴史を変える言葉は、日常の声で語られる。歴史を変えるとは、人間の日常を変えていくことであるから。

▼　年をとるまで自分でやれなかったことを、若い世代に依託したり期待するな。それより、自分がやろうとしてやれなかったのはなぜか、どのようにしくじったかを若者たちにあからさまに語り伝えろ。

（関根　隆）

連載その5

日中戦争の渦中、上海で命をかけ反戦闘争
― 西里竜夫の壮絶な半生 ―

小田憲郎

流れを変えた「西安事件」

一九三六年一一月、綏遠事件が勃発した。これは、満州を完全に制圧した日本が、さらに華北を中国から切り離し、支配を華北全体に拡大するために関東軍が主導して行った作戦であった。関東軍が育成した内蒙軍が関東軍の支援を受けて綏遠省東部に攻め入った。

度重なる日本軍の横暴は、一九三一年満州事変、一九三二年の「満州国」樹立以来高まっていた反日運動の火に油を注いだようなもので、抗議の嵐が中国全土に広がった。内蒙・関東連合軍の猛攻をしのいでいた傅作義軍に対する支援の輪が広がるなかで、日本軍との正面からの衝突を避け続けていた蒋介石もついに世論の高まりに抗しきれず、山東省に出動中の国民党中央軍に出動命令を下し、傅作義軍と合流して完全に内蒙軍を撃破した。

この勝利は民族敗北主義―“中国には、まだ日本と戦う力がない”という敗北主義を一掃するうえで決定的な役割を果たした。

しかし一方で、蒋介石は意のままにならない「全国各界救国連合会」の七人の幹部を一斉に逮捕し、救国会潰しを図った。民衆は彼らを「救国の七君子」と呼んでただちに釈放を要求する大運動に立ち上がった。

この「救国の七君子」逮捕の直後、中国共産党が「八・一宣言」（一九三五年八月一日）につづく「綏遠抗戦に関する電報」を全国に発し、抗日民族統一戦線の結成を呼びかけた。

それは、「日・満偽軍が、綏遠に攻め入った。前哨戦はすでに開始された。大規模な侵略戦争がまさに勃発せんとしている。中華民国の生死の関頭に当り、全国の兵力・人力・財力を総動員して抗戦に当たるべき時だ！」と、内戦の停止と、一致抗日を訴え、「愛国運動七君子の釈放」を要求し、「各党各派各軍の抗日救国代表者会議あるいは国防会議の召集」を呼びかけるものであった。

しかし蒋介石は「抗日」ではなく依然として「共産党殲滅」に執念を燃やし、陝西省北部に集結していた労農紅軍にたいし「二週間、永くて一ヶ月で中共軍撃破」と公言し、自ら第六次掃共作戦を指揮するために西安に乗り込んだ。蒋介石の

西安入りは、学生や大衆の「掃共戦停止、一致抗日」のデモで迎えられたが、蒋介石は一顧だにせず、一九三六年一二月一〇日参謀部会議をひらき、第六次掃共戦の作戦計画を決定した。そして一二月一二日、東北軍、西北軍ならびに陝西、甘粛、潼関外の中央軍二十数個師団の全軍に、総攻撃の動員令を発する段取りになっていた。もし東北軍が命令に従わない場合には、東北軍を武装解除し、また動員令と同時に秘密結社藍衣社と西安警察が共産党同調者をいっせいに逮捕する手筈まで整えていた。

電光石火の無血クーデター

まさにそれは決定的瞬間であった。蒋介石の総攻撃命令発動のその日、東北軍の張学良、西北軍の楊虎城が、動員令の先手を打ってクーデターを断行した。クーデターはほとんど血を見ることなく成功し、蒋介石は監禁された。張学良、楊虎城は蒋介石に「内戦停止・一致抗日」をふくむ「八項目」の要求を提示。張学良が差し向けた専用機で西安に急行した共産党周恩来の調停で蒋介石は基本的に「内戦＝掃共戦停止」をふくむ「八項目」を認めざるを得なくなり、第二次国共合作に向って中国情勢は大きく回転し始めることとなった。

歴史に名高い「西安事件」である。

解放された蒋介石は一二月二九日、国民党の緊急執行委員会を開き、「西北」問題の処理は軍事委員会に一任することを決め、張・楊軍にたいする軍事行動も、十年にわたる中共軍（労農紅軍）との内戦も停止され、「内戦停止・一致抗日」で心を一つにした「抗日民族統一戦線」が強化されていった。

盧溝橋事件そして日中全面戦争へ

一九三七年七月七日、盧溝橋事件が勃発した。日本政府及び軍部には西安事件後の中国民衆の圧倒的支持に支えられ強化された抗日民族統一戦線の力を正しく評価することができなかった。北平（北京）近郊の盧溝橋での日中両軍の小さな衝突は、現地司令官の間で停戦協定が成立し、それで治まるはずであった。にもかかわらず東京の日本政府と軍部が増派を決め、以後日中全面戦争へと発展していった。

日本軍部は中国の抗戦力を過小評価し、はじめ「三個師団で中支制圧」とか「上海を占領すれば、中国は屈服する」などと豪語していた。そこには戦力分析にあたって、中国側の兵力や装備状況の分析に偏り、人民に守られ支えられた中国軍の力、民衆の抗日意識とその団結力、抗日統一戦線の発展などを軽視する、あるいは理解できない日本軍部の致命的弱点があった。その結果、当初の「上海占領で中国屈服」が、つぎの段階では「南京占領で中国屈服」になり、さらに「武

漢占領で中国屈服」となっても中国を屈服させることはできず、戦線は際限なく奥地へ奥地へと伸び、武器弾薬、食糧の補給は途絶えがちとなり、果てしなき消耗戦、勝利の展望なき泥沼にのめり込んでいった。

戦闘の真っただ中で

こうした激しい戦いの中、西里は読売新聞上海総局の記者として、危険を顧みず敢て最前線への取材にでかけた。一つは、最前線の日本兵士の空気、気分、心情とその状態を正確に把握するためであり、それは日本兵に呼びかける反戦ビラを書くためにも必要だったからである。

もう一つは「忠実な従軍記者」として働くことで憲兵や警察の監視の目を逃れるためでもあった。

そうした取材、情報収集をもとに読売本社に記事を送るとともに、一方で日本兵に対する工作ビラの原稿も書いた。ただ、この頃になると憲兵や警察の監視の目はさらに厳しいものとなり、西里は反戦ビラをみずから配る危険を冒すことはできなかった。

南京傀儡（かいらい）政権の中枢に

一九三八年三月、日本政府は南京に「中華民国維新政府」を樹立した。それにともなって「宣撫工作」の一環として、中国新聞社がつくられ、その総元締めとして「中華連合通訊社」がつくられた。

西里はこの時、中支派遣軍司令部陸軍報道部長から呼び出され、これら宣伝関係の指導に当たるよう要請された。通信のことがわかり、中国語ができる人物が必要とのことであった。

内心「しめた！」と思った西里は、報道部長に確かめた。

「あなたは私が思想犯の前科者であることをご存知か？」

「それはすでに調査済みだ。しかしお前さんはもう転向したんだろう。」

上海の日本人記者の中でのリーダーシップとともに、この間の「忠実な従軍記者」としての実績と奮闘ぶりが認められているようだった。

「軍のご命令ならば…。しかし、私は読売の記者ですから、正力社長がウンと言えば考えます。」

「新聞社の方には、軍から連絡するから。」

ということで西里は、思いがけなくも「奏任官待遇」の軍嘱託として南京傀儡（かいらい）政権の中枢に迎えられた。その時西里は村子と結婚していたが、南京に単身で赴任した。村子は思想的には階級意識に目覚めていたわけではなかったが、西里の行動や考え方には理解を示し、場合によっては官憲に逮捕さ

れるかもしれないということも理解し、覚悟していた。

占領下の南京に党組織をつくる

西里は、中華連合通訊社で一〇人近くいた中国人記者を監督し、書いてきた記事に目を通すなどの仕事をしながら、「効果的な宣撫工作をやるためにはもっと優秀なジャーナリストが必要だ」と提案し、軍の承認のもと「新中国の建設方策について」という懸賞論文の募集を行った。

西里は軍部が気に入るような論文の骨子を書いて党組織に渡し、能力のある優秀な党員に応募させた。目論見通り、その党員が一席となり、西里の部下として正式に採用され、党組織作りの足がかりができた。以来半年の間に上海から通訊社の雑役夫や町の開業医などの形でつぎつぎと党員を南京に潜入させ、南京の党組織が確立された。

西里を中心とした党員グループは上海、満州についで南京でも動き出し、尾崎庄太郎が進めていた北平（北京）もあわせ、「日支闘争同盟」の新しい形での復活であった。

西里は一九四〇年三月に成立した汪精衛（汪兆銘）の国民政府でも引き続き、中華連合通訊社を改組した「中央電訊社」で内面指導にあたった。この段階になると国民政府の奥深くまで党組織が入り込み、汪政権の内情はほぼ完全に掌握できるようになっていた。何しろ汪精衛の夫人で、政権の裏の実力者、一番のキレ者といわれていた陳璧君のお気に入り秘書も党員であった。

病気帰郷、尾崎秀実との再会

一九四〇年夏、西里はチブスに罹り、四〇度を超える高熱にうなされる日々が続き、周りは西里の死を覚悟したが奇跡的に生き延びた。快復後、西里は療養のため妻子とともに郷里熊本に帰郷し、父も一緒に阿蘇の温泉に浸かったりしてひと夏を過ごした。西里は「一生のうちで、これが一番のんびりした私の生活であったろう」（『革命の上海で』二三二頁）と回想している。

南京帰任に先立って西里は上京し、読売本社へのあいさつとともに、日本の情勢を詳しく知るために尾崎秀実に会った。上海以来十年ぶりの再会であった。尾崎は当時、近衛文麿首相（第二次近衛内閣一九四〇年七月二二日～一九四一年七月一六日）の側近の一人として事務所を構えていた。日本政府の首相秘書と、中支派遣軍および汪精衛政権の事実上の広報部顧問の極秘会談とも言えるもので、それぞれ知る限りの情報を交換し、その日は尾崎の自宅に泊まり、九月末に南京に帰任した。

（以下次号に続く）